

なぞなぞの文化誌

トニー・オーガード著
橋 内 武 訳

本稿は、Tony Augarde, *The Oxford Guide to Word Games* (Oxford, 1984) の第1章なぞなぞ (Riddle) と第2章なぞなぞ詩 (Enigma) の試訳であり、訳書はいずれT書店から刊行される予定である。なお、訳者は去る1990年2月10日に岡山市教育センターで開かれた岡山民俗学会平成2年度研究発表大会でこの訳文を下敷にして特別研究発表、題して「イギリスのなぞなぞ——その文化誌」を行った。

第1章 なぞなぞ

なぞなぞ (riddle) は、もっとも古くから流布した言語遊戯である。それは、歴史上のどの時代にもあったし、世界各地に見出される。

アメリカの謎学者アーチャー・テラーによれば、「記録された最古のなぞなぞはバビロニアの教科書にあり、何ら文学的な磨きがかけていない。」例えば、「誰が一体妊娠せずに妊娠するだろうか、誰が一体食わずに太るだろうか」というなぞである。答えはおそらく「雨雲」であろう。バビロニアのもう一つのなぞは、なぞなぞらしく、銀のたんすと金の小箱のことを尋ねている。この答えは、「卵」であり、卵についてのよく知られたなぞなぞ「ハンプティ・ダンプティへいの上……」を思い起こさせるだろう。

ハンプティ・ダンプティとバビロニアのなぞの第1例は、なぞ作りに一般的な比喩表現を用い、物を人に喩えているのである。擬人法は、多くのなぞなぞの核心にある比喩的表現を代表している。アリストテレスは、なぞなぞが隠喩（メタファー）を創造する人間本来の性向から発達した事実注目し、複数のモノとあたかも別物のようにあるモノを述べることに共通点を認めた。

大抵の気の利いたことわざは、第一に隠喩を起源とし、第二に早合点した聞き手を欺くことに由来する。というのも、聞き手としては表面的には理解したと思ったそのときに、結論は自分の期待に反したものであることが判明するのだ。そこで、内心「まあなるほど！ でも理解しそこなった。」と言っているように思われる……。巧みに作られたなぞなぞは同じような成り立ちをしている。というのも、学習効果もあり、その表現はことわざ同様比喩から成り立っているからである。

コーンヒル・マガジン誌の1891年11月号に匿名で寄稿した者は、このような隠喩との関連性を用いて、なぞなぞと文学を比べてつぎのように書いている。

文芸復興の時代にはなぞなぞがよく作られてきたというのは、偶然ではない。一般になぞ作りに発揮される言語の力は文芸に働く力と全く同じものであると言えるだろう。ただし、なぞ作りではその力はより継続して働くのに対して、文学一般ではそのような力の強烈さと努力がより限定されている。隠喩、二次的な意味、意味を変える巧妙なグループ分け、語に融通を利かせるあらゆる力——これらは言語が聞き手にとって融通の利いたものにさせる力であり、より苦心したさまざまな効果を心得ているなぞかけ人によって実行に移される力である。

なぞなぞが見出されない国がたとえあるとしてもそれはほんの少数である。そして、なぞなぞには同じ主題が広く各地に見受けられるものである。例えば、塔の鐘はつぎの地域でなぞなぞの主題になっている。

スコットランド：

高いところに垂れ下がり、
痛い痛いと言き叫ぶ、
頭があっても髪はなし、
これは一体何だろう。

ウェールズ：

町の近くで見たもの。地上と天国の間に大層見事に作られた王宮の中。
地上に届くほどの長い見事なしっぽがあり、大層大きな頭のなかに舌が
垂れ下がる。大抵じっと黙りこくって過ごしているけれど、ときどき友
だちと叫び合う。

フランス：

引っ張れば、引っ張るほど、大声で叫ぶもの。

リトアニア：

銀のしっぽをした馬が高い丘でいなく。

セルビア：

死んだ雌馬はいななかないが、誰かがそのしっぽを引っ張ると誰にも聞
こえるほどいなく。

ニューファンドランド：

輪のように円く、手おけのように深い

しっぽをつかまえられと初めて大声で歌い出す

チリ：

カロライナ奥様は、高いお家に住みたがる
足を引っ張りゃ、近所迷惑この上なし

現代のなぞなぞは、「黒白でアカ [red] だらけってなあに？」というように通例問いの形式をとる。(答えは「本」。)だが、上に引用したなぞなぞは、なぞめいた陳述の形式をとる。このような形式が、概して最古のなぞの表現形式であったのである。サムソンが自分の結婚式に尋ねた有名ななぞなぞは、この形式をとるが、士師記の物語るところによればこうである。

サムソンは彼らに言った、「なぞなぞを掛けよう。宴の続く七日間に当てたなら、30反の亜麻布（リンネル）と30着の着替えをあげよう」と。すると彼らは言った、「なぞを言ってください、なぞを聞くことにしよう」と。

大食漢の中から食べ物が出てくる
強者の中から甘いものが出てくる

新妻はサムソンを説得して答えを教えさせた。答えは、「ライオンの死骸の中に蜜蜂の群れを見た」というものである。新妻は夫を裏切り、ペリシテ人に答えを漏らしてしまった。だから、ペリシテ人はサムソンに答えを提出することができた。

蜜蜂より甘いものはなあに
ライオンより強いものはなあに

この答えそのものが、（答えを「愛」とする）なぞのように聞こえるし、返答のなかでサムソンがさらにもう一つ隠喩を使って言うには、

私の雌の子牛と一緒に耕さなかったらば、
私のなぞが解けなかったであろうに。

列王記 I から知られるように、ソロモンもなぞなぞが大変うまかった。

シバの女王がソロモン王の名声を聞いてやってきて、数々の難問で彼を試した…… ソロモンには全問氷解であった。そのうち一問として難問すぎて王が答えられないというものはなかった。

聖書は、それがどのような問いであったかを語らないが、ずっと後代になって、1430年のヤチャ・ベン・スリーマンによるヘブル語のテキストによれば、女王のなぞなぞのいくつかが列挙されている。

「ある女性が自分の息子に言った。汝の父はわたしの父であり汝の祖父は私の夫である。だから、汝はわたしの息子であり、わたしは汝の姉である」と。「確かに」サムソンは言った。「そのように自分の息子に話したのがロトの娘であった。」「生きているときは動かないものであるが、その頭を切り離すと、動き出す。」「それは海に浮かぶ船。」「生きた木は動かない、木の幹から出た極上の枝は動く船を造るための材料を提供してきた。」(Folk-Lore, 1890)

なぞ解き競争は、多くの国の昔話でよく出てくるものである。古代ヒンズー教の聖典ヴェーダにも、12世紀北欧のエッダにも見出せる。人々は命を賭けてなぞ解き競争に挑戦せざるを得なかったのかもしれない。

『金枝篇』の中で、J. G. フレーザーは、さまざまな社会における結婚式

や葬式のような儀式とか収穫期になぞなぞがどのように取り交わされたかについて述べている。「ブルターニュでは、埋葬のあとほかの者たちが斎の膳に出ていってしまうと、年寄は墓地に留まり、互いになぞを掛け合う」というのだ。フレーザーは、このような危機的状況のもとでなぜなぞなぞが使われるのか理解することができなかったが、なぞ解きは多分生と死という大問題を解決する上で鍵になるものを与えるのだろうと考えられる。

なぞなぞは、古代ペルシャ人とアラビア人にとっても重要であった。ペルシャに由来するのが、トゥーランドットと三つのなぞなぞという話（この場合も解けないと殺される）である。『アラビアンナイト』を通して、トゥーランドットの話はイタリアに達し、プッチーニがそれをもとに最後の歌劇を創作した。

ギリシャ人は、懐疑的態度と知的創意を重んじて、多くのなぞなぞを作った。オイディプスはスフィンクスのなぞを解いてテーベを救った。いまトーマス・ド・クインシーの再話によってこの神話を紹介するところである。

スフィンクスの提出したなぞは、つぎのように述べられている。「朝には四本足で歩き、昼には二本足で歩き、日の落ちる頃には三本足で歩くのは、どんな生き物。」オイディプスは、多少考えを巡らしたあとで、その生き物は「人間」と答えた。というのも、人間は赤ん坊のときには、手足を使って地面を這い、成長して元気なときには立って歩き、年寄になると杖にすがるからである。直ちにスフィンクスは岩の突端から海へとまっさかさまに身を投げて、オイディプスの解答を正解と認めた。スフィンクスは秘密が見抜かれると、その超自然的な力を失ったのである。こうしてスフィンクスは滅ぼされた。布告で約束されていた通り、このなぞ解きは国家への偉大な貢献であるとしてオイディプスはすぐさま報われた。彼はテーベの王に迎えられ、先王の妃であるジョーカスタと結ばれた。(The Theban Sphinx, 1849)

スフィンクスのなぞは、古代ギリシャ時代から現代まで伝承されている。1940頃にチェスターのハウム家によって収集されたなぞなぞ集の冒頭を飾るのが、このなぞである。（「最初は四本足で進み、次に二本足、それから三本足、それからまた四本足に戻る生き物は、一体全体なあに。」）アイオナ・オピとピーター・オピは、二十世紀の今日カーカルディーの学童がこのなぞを口ずさんでいるのを聞いた。（「まず四本足で歩く／つぎに二本足で、そして最後に三本足で／足が増えれば、弱くなる。」）

スフィンクスのなぞを解くことで、オイディプスには不幸な結果がもたらされた。実は、ジョーカスタが自分の母であることが分かったからである。悲惨な結果を招来した別のなぞは、ホメロスが答えられなかったものである。何人かの権威者が言うには、ホメロスはそのなぞを答えられないことに落胆して死んだという。彼が、漁師たちに何を獲たのかと問うたところ、彼らは、「獲たものはあとに残した、獲なかったものはみんな運び去った」と答えた。答えは、ノミカシラミである。

ローマ人は、なぞなぞの創作ではギリシャ人よりも多作ではなかったが、サタナリアでなぞなぞ大会を開き、それを気楽な浮かれ騒ぎのお祭りにしたのである。そして、ローマの作家シンフォシウスは、多分紀元4世紀の末から5世紀の初頭にかけての人であったが、以後のなぞなぞ作家に著しい影響を与えた百のなぞを書いた。ここでその例を二つ挙げておこう。

文字はわたしを育ててくれたけれど、一体どんな文字であったか判らない。本の中に住んできたけれど、勉強好きであるわけはなし。ミューズの神々をむさぼりながら、私自身はいままでのところ何ら進歩はしていない。（答え シミ）

息が切れてもすぐには死なない。繰り返し戻り、しばしばまた息切れがする。ある時は蓄えた命が大きく、またある時はこれが全然ない。（答え ふいご）

シンフォシウスの影響はシャーボンのアルドヘルム司教の著作に明らかである。もっとも有名ななぞなぞは、『エクセター・ブック』に見出せる。これは紀元千年頃の草稿であるが、それよりもおそらく二百年ほど前に書かれたなぞなぞも載せている。マイケル・アレクサンダーによって現代語に翻訳されたつぎの例は、熊手の特徴を述べている。

女は家畜に餌をやる。彼女が
家の中にいるのも見かけた。歯の数も沢山で
鼻もよく利く。家の裏手に出かけて行っは
堂々と物を盗り、家へ引っ張きずり込む。
草や木がないかと、へいの周りをうろつき、
根が弱いものを見つけては集める。
でも、植えられた場所で
しっかりと根付き、日射しの中で輝く葉と
美しい花をつけるものだけが残る。

はじめて印刷された英語のなぞなぞ集は、『楽しい問題』であった。これは1511年にウインキン・ド・ウォードというカクストンから印刷術を学んだ人物によって出版された。このなぞなぞ集は、54のなぞなぞからなり、そのうち29はフランス語版の『冗談めいた楽しい問題』から失敬したものである。ド・ウォードは、フランス語版の中から卑猥ななぞの多くを省いた。シェークスピア劇の俳優ロバート・アーミンによれば、ヘンリー8世の道化師ウィル・ソマーズが王の「ひどい鬱病」を治すために卑猥ななぞを用いたという。その種のなぞは、エリザベス朝の多様ななぞなぞ集に見つけることができる。それらは「二重の理解」に因っていて、聞き手は答えが卑猥であると信じさせる一方で、答えは驚いたことに箒の柄や目のように害のないものであった。そのようななぞはウインキンの性格には不似合いであったのかもしれない。そのことは『楽しい問題』がつぎのような宗教的ななぞで始まっていること

からもわかるだろう。

かつてこの世に存在した中で最高の重荷を誰が支えたか。それは聖母が主とともにエジプトに逃れたロバが支えたのである。

このなぞなぞ集にある他の種類のなぞは、今日に至るまで残っている。例えば、ウィンキン・ド・ウォード作の「何頭の子牛の尾が地から天へと届くだろうか、ただの一本、長ければ」は、現代のなぞなぞにも「お月さんに届くためにゃ、糸まだいくつ要るだろうか」という形で残っている。[訳者註——答えは煙。] ウィンキンの「馬に一番似るのはなあに、それは雌馬」は、『よみがえった機知』（1655年）に所収のなぞ「穴のなかのネズミに一番似ているのは」とか『パスル』（1745年）所収のなぞ「窓の外を見ているネコに一番似ているのはなあに、窓の中を見ているネコ」に影響している。

ウィンキン・ド・ウォードは、現代の学童を喜ばせる類の単純なユーモアを楽しんでいる。

教会の尖塔には、なぜメンドリよりもオンドリを置くのだろう。—— もしも男達がそこにメンドリを置いたなら、つぎつぎと卵を生んで、それが彼らの頭に落ちるだろうに。

エリザベス朝におけるなぞなぞの人気は、『メアリーと陽気な女房たち』で言及されている事柄からはっきりする。無力なスレンダーが、会話でアン・ページを印象付けようとして、自分がとても滑稽な男であることを表すためになぞなぞをいくつか使おうとする。スレンダーは召使いのシンプルに尋ねていう。「おまえについての『なぞの本』を持っていないかね。」シンプルが答えて言うには、「『なぞの本』ですって！ オール・ハラウマスのアリス・ショートケイキさんに二週間前にお貸しになったではありませんか。」

言及されているその本が、はたして当時諸版が出た『笑いを呼ぶなぞの本』

と同じものであるかは定かでない。この本には当時以来古典になった数多くのなぞなぞやどのようにしたら子羊と狼と干草の山を一時に川を越えさせることができるかという由緒あるなぞなぞが書かれていたのである。この本に載っているなぞなぞの中には、下記がよく知られたなぞのように答えが問いとほぼ同じぐらい長いものも散見される。

2 本脚が 3 本脚の上に座り、1 本脚を手を持った。それから 4 本脚がやってきて、1 本脚を運び去った。すると 2 本脚が急に立ち上がり、4 本脚に 3 本脚を投げつけて、また 1 本脚を持ってきた。—— 答えは、2 本脚の女性が 3 本脚の腰掛けに座り、マトンの脚を手を持った。それから、4 本脚の犬がやってきて、マトンの脚を運び去った。それから、女性が急に立ち上がり、3 本脚の腰掛けを 4 本脚の犬に投げつけて、またそのマトンの脚を持ってきた。

このなぞなぞ集にあるなぞをもうひとつ紹介する。

ある男、森にいて、捕まえて、
自ら座って、搜した。
見つけられずに、
持ち帰ったよ、お家まで。

答え、それはとげである。男は森に行き、足にとげが刺さったのである。

このなぞは、3 世紀後アレクサンダー・ニコルソン (1938) によって刊行されたゲール語のなぞなぞ集にも入っている。また、1864 年 10 月 8 日号の『覚え書と質問』という学術雑誌は、寄稿者が書いたと主張する「手のとげ」についてのなぞを載せている。

わたしは森に行き、それを捕まえた。

それから座って、それを捜した。
自分の捕まえたものを、
どんなに長く捜しても、
それを捕まえるなんて無駄だと思った。
捜していたときには、
とうてい見つからず、
それを手に持って帰った。

さらにもう一つ『笑いを呼ぶなぞの本』の1631年版から、ベアトリックス・ポッターの『リスのナツキン』を知っている者には見覚えのあるであろうなぞをつぎに掲げる。

ヒッター・ピッター　へいの内
ヒッター・ピッター　へいの外
もしもおもちゃのヒッターに触れたなら
ヒッター・ピッターが坊やを噛むだろう

アイオナ・オピとピーター・オピが説明するように、

リスのナツキンは、イラクサでフクロウのブラウン君をくすぐりながら跳ね回っているときに、このなぞを口ずさんだ。リスのナツキンがスコットランド出であれば、ヘグベッグ、ホッピティー・ボッピティー、ロビィー・ストッビィーなどと口ずさんだであろうし、ドイツのリスであれば、クリップル・クラッペとかピーター・クルスと言ったであろう。だが、イングランドに3世紀前に生きていたら、おそらく当てもヒッター・ピッターと唄っていたであろう。

リスのナツキンによるもう一つのなぞ、「ヒカモア・ヒカモア、王宮の勝手

口」(とは太陽光線のこと)は、少なくとも9世紀の半ばに遡る。

「ヒッティー・ピッティー」のなぞは、『ホームなぞなぞ集成』(1670年頃)にも載っている。このなぞなぞ集成は、上に述べたスフィンクスのなぞのほか、下記の例のような古典的ななぞを多く収録している。

家のまわりをあちこち動き回って、窓に手袋を残していくものがある。
(答えは、雪。)

私には白いコートを着た可愛い坊やがいる、
その子は大きくなればなるほど、小さくなる。
(答えは、火を灯したローソク。)

このローソクのなぞは、途切れることがない。類似のなぞは、ハンガリーにもノヴァ・スコシアにも見出される。

女王様が椅子に座っている。
白いガウンを召しながら、
涙をひざに落としている。
(ハンガリーのなぞ)

ニッビーがきた、ナッビーがきた、
赤い鼻をして
立てば立つほど、小さくなる
(ノヴァ・スコシアのなぞ)

『親指トムのすばらしいなぞなぞ』(1788年)には、つぎのような形で載っている。

ナンシーの着ている白いペチコート
赤い鼻して

立てば立つほど、小さくなる

このなぞは、ジョン・ハーランドとT. T. ウイルキンソンによる『ランカシャーの伝説』(1873年)には、つぎのように出ている。

小さなナンシー・ネティーコート

着ている白いペチコート

立てば立つほど

小さくなる

さあ手を組んで

だれが知ってる 言ってみな

アイオナ・オピとピーター・オピは、この唄が1950年代にショロップシャーとアバラスビスとバーミンガムとマーケット・レイゼンの学校で唄われているのを目撃したのである。

『親指トムのすばらしいなぞなぞ』にもつぎのようなよく出るなぞが載っている。

宴会に行ったら、野獣に出食わした

頭も10で、しっぽも10

脚は40に爪80

答えは、9頭の子豚とともにいる1頭の雌豚。これに似たなぞには馬に乗った男と女のなぞがあり、『新しいなぞなぞ集』(1810年)にはその特徴が述べられている。

互いにぴったりと結び合っているのに、よく見ると3つ別々の体であることが判った。合わせて8本の脚があり、一方には5本、他方には3本。

口は3つで、そのふたつはまっすぐ前を向き、3つ目は横を向く。目は6つで、一方は4つ、他方には2つ。耳は6つで、一方は4つ、他方には2つ。

もちろん、婦人のほうは横乗りをしていなければならない！ これとよく似たスチュアート朝のなぞは、2本の手と2本の腕のある8本脚の動物（つまり、馬に乗った人）がタカを運んでいるというものである。

そのようななぞは、驚くべき総数をもって聞き手を当惑させようとするもので、類例に「セントアイブス」のなぞがある。これは、18世紀の初期まで溯るものである。

私がセントアイブスに行こうとしていたら、
7人の妻がある男に出会った。
妻には各々7つの袋があり、
袋には各々7匹の猫があり、
猫には各々7匹の子猫があった。
子猫たち、猫たち、袋、それに妻たち、
セントアイブスに行こうとしていたのは、
どれだけいただろう。

答えは、「皆無」か「一つ」である。

『ヘラクリタスとデモクリタスのなぞなぞ』（1598年）には、このようななぞがある。

粉屋と粉屋の妻が、
浮かれはしゃいで、
器に盛った果物とケーキ1個半を下に置いた。
それに町の教区牧師と

その妹だけがいた。
いますべての客と
とっておきの食糧のことを聞いた。
さて皆さんこの事態に対処して、
手際のよさと技量と腕前で、
ひとりずつ半個のケーキを食べ、
お開きとあいなった。

「粉屋の妻とは教区牧師の妹のことだから、ケーキは難無く半分ずつに分けられる」というのが、著者の説明である。
さらに戸惑うのが、つぎの問題である。

梨が12個高いところにぶら下がり
騎士12人馬に乗って走り過ぎる
騎士は銘々一個ずつ梨を取る
それでも、残った11個

これには、いろいろな答えが考えられてきた。例えば、騎士一人ずつがみんな特定の同じ梨を取ったという解釈、ペア（梨）はペア（組）に通じるという解釈があるが、もっともありそうな答えは、梨を取ったのはたった一人の騎士で、その名をイーチナイト（Each-knight）というものである。この答えは、1478年に刊行されたフランス語のなぞなぞ集 *Les Adeuineaux amoureux* にある類例から証拠づけられる。

僧侶3人過ぎていく
3個の梨がぶら下がり
銘々1つ取って行き
それでも2つ残った

答え、僧侶の一人は Chascun という名であった。

このような韻文なぞは、「ハンプティー・ダンプティー」や「ヒカモア・ハカモア」や「長い脚して、股曲がり、頭小さく、お目目なし」(火箸)のようにいまでも伝承童謡の中に多く残っている。今日大抵のなぞなぞは、実際のところ地口なぞである。つまり、洒落(本書第25章参照)によるなぞなぞである。洒落はふつつ答えの中にある(「ドアがドアにないのは、どんな場合。」「それが、瓶(半開き)の場合。」)のだが、問いの中にある場合(「一年中で一体いつが一番重要なフライデー(フライパンでパンケーキをつくる日/金曜日)だろうか」「ざんげ火曜日」)もある。

この頃では、地口なぞは、子どもっぽいとされて、子どもの遊び場でこそうってつけであるが、大人の場合クリスマス・クラッカーを引っ張るときのようにくつろいだときにのみ適している。(もっとも、地口もマッチ箱の裏にはいまだに残っているけれど。)しかしながら、19世紀には地口なぞはもっと受け入れられるものであったようだ。ジェーン・オースチンの『エマ』(1816年)という小説の中には、ハリアット・スミスが地口なぞを含む多様ななぞなぞを集めているという描写が見られる。

現在ハリアットを引きつけている唯一の文学的探求、もしくは晩年のための唯一の知的な備えは、出会ったあらゆる種類のなぞなぞをすべて収集して、友人の作った、頭文字などの組み合わせと戦勝記念品で飾られた、光沢のある薄い4つ折り判の紙に書き写すことであった……。彼女が助けを乞うたのは、エルトン氏だけであった。氏は、思い出しては、実に見事な仕草なぞや地口なぞなどを提供する。彼女は、氏が思い出すことに大層熱心であるのを見て喜んだ。そして同時に彼女は気づいていたのだが、色事ないしはセックスへのほめ言葉が彼の口から出てこないようにと、ひどくまじめで用心深かった。もっとも上品な二三のなぞは、彼のおかげでできあがった。

ボックス・ヒルへの旅行の途、ウェストン氏は地口なぞをこしらえてエマを誉める。

「完全を表すアルファベットの2文字は何だ。」

「2文字——完全を表すって。わたしには分からない。」

「あれ、考えつかない。私にははっきりしているが、エマ (Emma) は、考えつかない。では、お教えします。M と A, そうエマです。お分かりかな。」[訳者註——M は mighty に、A は aceに通じる。]

理解と満足感が一度に得られた。このなぞは取るに足らない機知であったのだろう、エマはこれに大笑いして、ひどく喜んだ。

地口なぞは、洒落によるので、その答えに聞き手がたびたびうなりがちである。フレデリック・プランシェイの『僕を言い当てて』(1872年)からいくつか例を挙げておこう。

コーヒーが土のようなのは、どういうとき。それが, *ground* [地面/*grind* (挽く)の過去分詞] のとき。

廊下の新しいマットにつまずいたとき、どんな科学をおろそかにしていることが示されるか。*Pneumatics* (空気力学)。[訳者註——語頭のPは黙字。]

思想はなぜ海に似ているか。それは観念 (*a notion/an ocean* 海洋) だから。

彫刻家はなぜ激しい発作が爆発するのか。*make faces* (顔を作る/しめつつらをする) し, *make busts* (胸像を作る/爆発する) から。

ネコちゃんは、なぜゴロゴロのどを鳴らすのか。はっきりした目的 (*purr-puss / purpose*) のために。

ピーター・パズルウエルの『家庭の遊戯』(1859年)は、今日なお知られているいくつかの地口なぞを含む。例えば、

アラビアの砂漠は、なぜピクニックに絶好の場所であるか。そこにはサンドウィッチイズ (*sandwiches / sand which is* 砂がある) だから。

アヒルはなぜ首を水に突っ込むのだろうか。ダイバーズ (*divers* 水に潜る鳥 / *divers* 種々の) 理由で。

生後3週間と2日のヒナはなぜ道を横切るのだろうか。向こう側に行くため。

この道路横断のなぞは、多分もっともよく知られたなぞであろう。もっとも、今日ふつう「ヒナはなぜ道を横切るのだろうか」という問いであるが。これは、もう一つの種類の一般的ななぞを例証している。この種のなぞは、解答者が思いつかないほど答えが明白である。ほかに類例を挙げると、

灯が消えたとき、モーゼはどこにいたか。

暗闇のなかに。(ときには、「マッチを捜し求めてベッドの下の」とか「寝間着を着てベッドの下の」といった句を加えることもある。

エンドウ豆のおかゆが熱い

エンドウ豆のおかゆが冷たい

鍋の中のエンドウ豆のおかゆは

9日前のもの

それ (that) を 4 文字で綴ってごらん。

T, H, A, T.

粉屋はなぜ白い帽子をかぶるの。

頭を覆うために。[著者註 — これは現代の学童の間で知られているつぎのなぞの1745年版である。「エディンバラ公はなぜ赤と白と青のズボンつりをしているの。ズボンをつり上げておくためさ。」]

シャクナゲと冷たいアップルダンプリングの違いはななに。

一方がシャクナゲで、他方が冷たいアップルダンプリングだということ。
[訳者註 — アップルダンプリングとは、リンゴを練り粉の衣に包んで焼いた団子のこと。]

このなぞはホフマン教授著『客間の遊戯』(1879年) から来ているのだが、著者は「きっと読者もそれ以上大きな違いを望むまい」と付け加えている。多くの地口なぞは、「AとBの違いはナーニ」の型をとり、しばしば2語の間で巧妙な入れ替えがある。例えば、

機関手と校長の違いはナーニ。

一方は列車を気に懸けるのに対して他方はものの考え方を教育するのだ。
(One minds the train, the other trains the mind.)

恋の勝利者と振られた者の違いはナーニ。

一方は妻に接吻し、他方は接吻をしそこなう。(One kisses his missus, the other misses his kisses.)

象とノミの違いはナーニ。

象はノミをもつことができても、ノミは象をもつことができない。

猫とコンマの違いはナーニ。

猫は足の端に爪があり、コンマは節の終わりに区切りがある。

なぞなぞには、まだこのほかに、アルファベットの文字に関係する類もある。

アルファベットのどの文字が、新案のらっぱ型補聴器よりも耳の不自由な女性にもっと役立つのか。

Aという文字である。というのも‘her’を‘hear’にするからである。

パリはなぜFという字に似ているの。

フランス (France) の首都 (頭文字) だから。

Tの文字はなぜ復活祭に似ているの。

四旬節 (Lent) の終わりに到来するので。

フランス語でもこれに似たなぞなぞがある。例えば、

Je

Et

Et

La letter

ルイス・キャロルは文字解きなぞとフランス語を組み合わせ、友人のアグネス・ハルに尋いた問いは「アグネスはなぜ大抵の人よりも昆虫に造詣が深いのか。」これの答えは、「彼女は昆虫学に深く没頭しているから (Because she is so deep in entomology.)」であった。ルイス・キャロルは、次のよ

うに答えを説明している。

もちろん ‘she’ は ‘elle’ である。（知らなかったら、少なくとも、フランス語のよい勉強になるね。）さあ、では ‘elle’ が昆虫学に造詣が深いのはなぜ。おい、アグネス、アグネス綴れないのかい。L は ‘entomology’ の 7 番目の字だろう。この語のほぼ中ほどにあるだろう。だから、（たまたまもっと深い井戸（deeper well）でないかぎり）これ以上相当深く（well deeper）にはあり得ないというわけ。

『不思議の国のアリス』の中で、ルイス・キャロルは「ワタリガラスは文机に似ているのはなぜ」という答えのないなぞなぞを出している。あまりにも多くの読者が答えを要求したので、キャロルは結局「ともにノート（鳴き声、短い手紙）を出せるが、ともに平べったいし、誤って前後ろにすることがないので」という答えをでっち上げた。アメリカのパズル専門家サム・ロイドは、ほかに考えられ得る答えを二三提案した。

- ①「双方が注意するノートは、音楽の楽譜のために書き留めるわけではない。」
- ②ビル（番組／請求書）とテイル（尾／話）が双方の特性である。
- ③作家エドガー・アラン・ポーが双方について作品を書いた。

ヴィクトリア女王がなぞなぞをおもしろがったことは、女王に仕えた者の一人が『女王様の私生活』（1897年）に描写している通りである。

女王様は巧妙ななぞか判じ物にお喜びになりますが、あるときこんなことがおきました。女王様がソールスベリーの主教が作ったという趣旨の手紙とともに送られてきたなぞなぞでかつがされたと大層お怒りになりました。4 日間というもの女王様とアルバート公が答えを求めあぐねた末、王室の侍従長であったチャールズ・マレー様が主教に手紙を書いて、なぞの答えを尋ねるようにとの御指示でした。ところが、受け取った返事は、主教はそのようななぞはつくってもなければ、自分にも解きかね

るというものでした。

しかしながら、なぞなぞの人気は、19世紀末までにはすでに衰えかけていた。このことはある著者が『チャンバーズ・ジャーナル』誌の1893年7月29日号に書いていたところから明らかである。

この世代の者にとって幸運なことに、英語のなぞなぞという圧政は過ぎ去った。そのような会話の興をそぐものに精通していることは、長いこと社会的出世の後循として評価されてきた。

なぞなぞは、ほとんど全くと言っていいほど学童の領分になってしまったが、子どもはいまでもなぞなぞに大喜びで、その多くは彼等が生まれる以前からあるものである。『クラッカージョーク・ブック』（1978年）のために子どもが提供したジョークの大半が、なぞなぞの形式をとっている。

人が寢床に就くのはなぜ。(Why do people go to bed?)

寢床に人が就かないから。(Because the bed won't come to bed.)

熱さと寒さではどちらが速い。(Which is the fastest, heat or cold?)

熱さ。風邪を引く（寒さを捕まえる）ことはあり得るから。(Heat. Because you can catch cold.)

土砂振りよりも悪いのはナーニ。(What's worse than cats and dogs?)

雨あられと降りかかる税金。(Hailing taxes.)

歯痛のライオンと暴風雨の違いはナーニ。(What's the difference between a lion with a toothache and a rainstorm?)

一方は痛みで唸るが、他方は雨で水が流れ出る。(One roars with pain

and the other pours with rain.)

フクロウが唸ったのはなぜ。(Why did the owl 'owl?)

キツツキがくちばしでつついたから。(Because the woodpecker woodpecker.) [訳者註 — 'owl は howl の省略形。]

象一頭が御宅の冷蔵庫の中にいたかどうかをどのようにして示すことができるか。(How can you tell if an elephant has been in your fridge?)
バター (頭で突く獣) の中に足跡。(Footprints in the butter.)

この最後の例は、明らかに現代のものであり、1970年代に存在した象さんなぞへの熱中の典型例である。しかし、最初の3つは、19世紀かそれ以前に遡る。

なぞなぞは、もはや J. G. フレーザーが『金枝篇』で述べたような儀礼とか儀式の場で使われることはない。しかしながら、いつも喜んでなぞ掛けをし合うことにより、子どもたちは、さもないと廃れてしまうであろう大変に古い慣習を永続させているのだ。アメリカの民俗学者チャールズ・ボッターが1950年に思い出したように

私は冬の夜に暖炉のそばで座って、父と母が、ちょうど彼等の両親が教えた教義問答集を読むように、代わりばんこに問うなぞなぞに答えを出していた。それは自分の教育の一部であり、小学校の授業よりもずっとおもしろかった。(Funk and Wagnall's Standard Dictionary of Folklore)

第2章 なぞなぞ詩

狭義のエニグマ (enigma) は、単なる一種の韻文なぞ（あるいは、なぞなぞ詩）である。なぞなぞはしばしば韻文で表現されてきたが（第1章参照）、めったに優れた詩にはなっていなかった。しかしながら、ある時期、特に18世紀と19世紀には、韻文なぞが一種の詩歌としてなぞなぞ同様に重要なジャンルへと発展した。

多分この種の最初のなぞなぞ詩は、トーマス・ワイアット卿（1503?–42）というヘンリー8世の宮廷詩人によって書かれたものである。彼の書いたなぞなぞ詩の一つは、*Anna* という女の名についてのものであるが、おそらく Anne Boleyn に捧げられたものであろう。

What word is that, that changeth not
Though it be turned and made in twain?
It is mine answer, God it wot,
And eke the causer of my pain.
A love rewardeth with disdain,
Yet is it loved. What would ye more?
It is my health eke and my sore.

そはいかなる言の葉、変わらずに
振り返れば、爪二つ
わが答え、神のみぞ知る
さらに痛みを引き起こすもの
愛の報いは軽蔑
されど愛される、この上なく尊い御方
そはわが安らぎ、心の痛み

つぎにワイアットの作ったなぞなぞ詩をもう一つ。答えは「接吻」(*a kiss*)であったらう。

A lady gave a me a gift she had not,
And I received her gift I took not.
She gave it me willingly and yet she would not,
And I received it albeit I could not.
If she give it me I force not,
And if she take it again she cares not.
Consider what this is and tell not,
For I am fast sworn I may not.

御婦人が私に贈物をくださったが、それは彼女のものではなかった。
私は受け取ったが、手にすることはなかった。
彼女は喜んでそれを私にくださったが、与えるつもりはなかった。
私には受け取ることができなかったが、いただいた。
もし下さるとしても、私がお願いしたからでもない。
また私から再び取り上げても、気になさることもない。
何であるかわかっても、口に出して言わないで。
というのも言わないと固く誓ったから。

17世紀にアメリカへ移民したサミュエル・ダンフォースというイングランド出身の画家は、自作の暦の中になぞなぞ詩を印刷して刊行した。例えば、つぎのなぞは、開拓移民に必需品を持ってきた船の特徴を述べている。

The wooden birds are now in sight,
Whose voices roar, whose wings are white,
Whose maws are filled with hose and shoes,

With wine, cloth, sugar, salt and news,
When they have eased their stomachs here
They cry, farewell until next year.

木製の鳥いま見える
うなりごえ、白い翼
胃袋は靴下と靴と
葡萄酒と布と砂糖とニュースで一杯
ここで胃袋を楽にすると
鳴き叫ぶ、来年までのお別れ。

なぞなぞ詩は、18世紀の初頭までに明確に確立された。このことは『思い
つきのよい人のための楽しみごと』（1711年）の抜粋から証明される。

真理が仮装して歩き、思考の繊細さと表現の美が初めから終わりまで輝き、
功妙に工夫して上手に作られたなぞなぞ詩は、私の知っている娯楽のな
かでもっとも感じのいい楽しいものの一つである。さらにまして心地よ
いのは、利口な解答者の手に落ちた場合の解説である。私の言いたいこ
とを説明するためには、その例を一二読者に披露するのがよいだろう。

An Enigma

I'm thick, I'm thin, I'm short and long,
And loved alike by old and young;
I make disease, I heal,
And know what I shall ne'er reveal.
The fairest virgin, fraught with pride,
No beauty from my view can hide.
I rack the miser, cure the sot,

And make, and oft detect a plot:
No lover that would happy be,
Desires his mistress more than me:
Yet though a thousand charms I have,
Next stop from me is to the grave.

なぞなぞ詩

私は、厚く、薄く、短く、長い、
老いにも若きにも好まれて、
病気も作れ、いやしもある、
そういう私は正体を暴露しない。
誇りに満ちた、誰よりも美しい処女、
私の視界からは、一人として美人は隠れることができない。
欲張りを苦しめ、大酒飲みを治し、
話の筋をこしらえて、しばしばそれを見破る私。
どんなに幸せな恋する男でも、
恋人よりも私を選ぶ。
数多の魅力をもちながら、
つぎの道程、墓場行き。

The Explication

A *bed* may be little or great, short or long,
The strong it makes weak, and the weak it makes strong,
Oppressed with his load, the sot there finds relief,
And the miser is racked with the fears of a thief:
The lady's there gentle, and free to her lover,
And what might it not, could it tell us, discover !
There plots are oft hatched, and as often detectd,

And things well contrived that are never effected:
There dreaming of peril and pleasures we lie,
And wretched and happy, we are born and we die.

解 釈

「ベッド」は、大小長短さまざまで、
強者を弱め、弱者を強め、
重圧感で悩んだが、その飲兵衛ほっとして、
その欲張りはこそどろが心配だ。
御婦人はそこで静かに、彼氏には御自由に、
それが何だか、お分かりなら、見つけ出せ！
筋は作られるごとに見ぬかれて、
成り難しことをやりのける。
そこに横たふ危険と快楽の夢を見て、
不幸で幸福、わが誕生と死。

なぞなぞ詩の作品集は、18世紀にいくつか刊行されたが、19世紀の初期にはそれをさらに上回るなぞなぞ詩集がでた。ジョナサン・スウィフトとその仲間は、なぞなぞ詩を楽しんで書いた。

Ever eating, never cloying,
All devouring, all destroying,
Never finding full repast,
Till I eat the world at last. (Time)

絶えず食べても食べても飽きず、
全てをむさぼり、全てを滅ぼし、
ついに世界を食い尽くすまで、

十分な食事の量が見出せぬ。

(時間)

We are little airy creatures,
All of different voice and features,
One of us in glass is set,
One of us you'll find in jet,
T'other you may see in tin,
And the fourth a box within,
If the fifth you should pursue,
It can never fly from you.

(vowels)

ぼくらはちいさくはかないもの、
みんな異なる声と顔立ち、
一人は glass の中に置かれている、
一人は jet の中に見つかるよ、
別の一人は見えるだろう tin の中、
4 人目は box の中、
5 人目を追い求めても、
上様 (you) から飛び去ることはない。

(母音)

アングロ・サクソン (古英語) で書かれた韻文なぞのいくつかのように、多くのなぞなぞ詩は物を人物であるかのように述べる。スウィフトによるつぎのなぞは、例によって低俗な主題を扱っているが、まさにその好例である。

Because I am by nature blind,
I wisely choose to walk behind;
However, to avoid disgrace,
I let no creature see my face.

My words are few, but spoke with sense:
And yet my speaking gives offence:
Or, if to whisper I presume,
The company will fly the room. . . ('The Posteriors')

ぼくは生まれつき目が不自由、
 賢明にもうしろを歩く。
 だが、恥を避けるため、
 だれにも顔を見せますまい。
 ことばはほとんどないけれど、感覚で物を言い。
 ぼくの発言無礼千万。
 ささやこうかと思えば、
 同席者が部屋から逃げるだろう。

(「尻」)

ホレス・ウォルポールは、つぎのなぞなぞ詩をアイザック・ニュートン卿の作と考えている。

Four people sat down at a table to play;
They play'd all that night, and some part of next day:
This one thing observ'd, that when they were seated,
Nobody played with them, and nobody betted:
Yet when they got up, each was winner a guinea;
Who tells me this riddle, I'm sure is no ninny.

(*musicians*)

4人の者がプレイするためにテーブルのところに腰掛けた。彼らは一晩中プレイし、翌日もある程度プレイした。彼等が座っているときには、誰も彼等とプレイしないし、

誰も賭けないということに気づいた。
しかしながら、彼等が立ち上がると、
おのおのは1ギニーの授賞者であった。
だれがこのなぞ教えてくれる、分かっているよ、
バカじゃなし。 (演奏家)

これは、「なぞなぞ」と称せられているが、なぞなぞとなぞなぞ詩の間に線を引くのはしばしば困難を伴う。主な相違点は、後者が単なる韻文ではなくて、詩的特性をもっているということである。この違いは、つぎのアルファベットの文字に関する2つのパズルで例示することができるだろう。第1の例は、*A New Collection of Enigmas, Charades, Transpositions, etc.* (1810) から転載したものである。

Pray ladies, who in seeming wit delight,
Say what's invisible, yet never out of sight. (the letter 'l')

見せかけの機知に喜んでいる御婦人たちよ、どうか
全然見えないわけではないが、隠れているものを当ててください。
(Lという字)

第2の例は、もっと詩的特性があり、W. M. プレイドの『詩集』(1864)に見出す。

Through thy short and shadowy span
I am with thee, Child of Man;
With thee still, from first to last,
In pain and pleasure, feast and fast,
At thy cradle and thy death,

Thine earliest wail, and dying breath.

Seek not thou to shun or save,

On the earth, or in the grave;

The worm and I, the worm and I,

In the grave together lie.

(the letter 'A')

汝の短く、影のような生涯に

我は「人の子」汝とともにいる。

常に汝とともに、はじめから終わりまで、

痛みと喜び、祝宴と断食の時も、

汝の誕生と死の瞬間にも、

産声をあげる時も、息を引き取る時も。

避けることも救うことも求めるな。

地上か墓場に

虫けらと我、虫けらと我

墓場でともに横たわる

(Aという字)

つぎのなぞなぞ詩は、大層有名なものであり、これと主題が似ている。バイロン卿の作であるとされているが、実際にはキャサリン・ファンショウが1814年頃書いたものである。初版においては、第1行が 'Twas in heaven pronounced, and twas muttered in hell' (天国で宣告されて、地獄でつぶやいた) となっていたものをホラス・スミスがそれをより身近な表現に直した。

'Twas whisper'd in heaven, 'twas mutter'd in hell,

And echo caught faintly the sound as it fell;

On the confines of each 'twas permitted to rest,

And the depths of the ocean its presence confess'd;

'Twill be found in the sphere, when 'tis riven asunder;
'Tis seen in the lightning, and heard in the thunder;
'Twas allotted to man from his earliest breath,
It assists at his birth, and attends him in death;
Presides o'er his happiness, honour and health,
Is the prop of his house, and the end of his wealth;
In the heaps of the miser 'tis hoarded with care,
But is sure to be lost in his prodigal heir;
It begins every hope, every wish it must bound;
It prays with the hermit, with monarchs is crown'd;
Without it the soldier and seaman may roam,
But woe to the wretch that expels it from home!
In the whispers of conscience 'tis sure to be found,
Nor e'en in the whirlwind of passion is drown'd;
'Twill soften the heart, but, though deaf to the ear,
'Twill make it acutely and constantly hear;
But, in short, let it rest; like a beautiful flower,
Oh ! breathe on it softly, it dies in an hour.

(the letter ' H ')

(C. M. Fanshawe, *Literary Remains*, 1879)

天国でささやいた、地獄でつぶやいた、
こだまが、弱まるにつれて、音をかすかに捕らえた。
土地の境界線にそれが休むことが許された。
海の深底にその存在は認められた。
それは空に見つかるだろうが、そのとき別々に裂かれる。
それは稲妻の中に見えるし、雷鳴の中に聞こえる。
それは生まれてはじめて息をしてから人間に与えられたもの。

それは誕生時に手伝い、死において臨席する。
それは幸福と名誉と健康を統轄し、
家の支えで富の目標である。
大の守銭奴の手で注意深く蓄えられる。
だが、きっと放蕩息子に散財をさせられるだろう。
それは心のおどるあらゆる希望と願いになる。
それは隠遁者とともに祈り、皇帝とともに冠を戴く。
それなくば兵士も船員も放浪する、
だが家からそれを追い出す悪党に災いあれ。
良心のささやきの中にそれはきっと見つけられる、
情熱の嵐にさえ溺れ死ぬことがない
それは、耳には聞こえないけれども、心を和らげるだろう。
実際には、絶えずそれを聞かせるようにするだろう。
だが要は、休ませよう、美しい花のように、
ああ、その上で静かに息をすれば、それは一時間後に死ぬ。

(Hという字)

(C. M. ファンショウ, 『文学的遺稿』, 1876)

チェスターフィールド卿とか俳優のガリックとか詩人のウィリアム・クーパーのような著名人は、なぞなぞ詩を書いてみた。クーパーは、トーマス・ワイアット卿が二世紀以上も前に使ったのと同じ主題を用いた。

I am just two and two, I am warm, I am cold,
And the parent of numbers that cannot be told.
I am lawful, unlawful, a duty, a fault,
I am often sold dear, good for nothing when bought.
An extraordinary boon, and a matter of course,
Anmd yielded with pleasure when taken by force.

Alike the delight of the poor and the rich,
Though the vulgar is apt to present me his breech.

(a kiss)

私はただ二つと二つ、私は暖かく、私は冷たい、
それで数の始祖については教えられない。
私は、合法であり、非合法であり、義務であり、責任であり、
しばしば高く売られるが、買われると役に立たない。
途方もない恩恵と当然の事柄、
力づくで手を取られると、喜んで負ける。
貧しい者と富める者の歓喜に似て、
野蛮な者は私を彼の尻に向けがちだ。 (接吻)

なぞなぞ詩は、ヨーロッパの他の地域でも同じくらい人気がある。ドイツの詩人シラーが数編書いた。ピオッツイ婦人が1819年5月4日付けの手紙にフランス語のなぞなぞ詩を引用しているが、これはルソーの作と思われる。

Enfant de l'art, enfant de la nature,
Sans prolonger la vie j'empêche de mourir;
Plus je suis vrai, plus je suis imposteur;
Et je deviens plus jeune à force de vieillir.

芸術の子、自然の子、
人生を延長させることなく、自分の死を引き止める。
本物に近ければ近いほど、詐称者である、
年を取っても、まだ若さで元気づいている。 (肖像画)

エニグマは、[原則として韻文であるが] 散文でも書かれる。なかでも、

もっとも複雑なものの一つにルイス・キャロルが1866年に「自費出版」したつぎの例がある。

エニグマ

ぼくは、大きな箱1つとふた2つと帽子2つと規定の測定器具3つと大工さんにはなくては困るものをいっぱい持っている。——それから、ぼくのそばには常につぎの生物がある。新鮮な魚2匹、より小さな生物多数——2本の高い木、きれいな花、原産植物の果実、美しい雄鹿、2頭の遊び好きな動物、より小さな、飼い慣らされていない動物の大群。それから、ふたつの寺院、数個の武器、数多くの風見鶏を持っている。その上、ホテルの階段と解散直前の下院に二人の学生（もしくは学者）と数人のスペイン大公が、ぼくに仕えている。

みんなぼくをすばらしい装置だというのが、ぼくの全体を組立てている奇妙なものの寄せ集めを数え尽くした人はほとんどいない。

エニグマの解釈

全体はヒト。

部分はずぎのとおり。

大きな箱——胸 (chest)

二つのふた——まぶた (eye lids)

二つの帽子——びざのさら (kneecaps)

規定の測定器具3つ——爪 (nail), 手 (hand), 足 (feet)

大工さんにはなくては困るものいっぱい——爪 (nail)

新鮮な魚2匹——足の裏 (soles of the feet)

より小さな動物多数——筋肉 (muscles / mussels)

2本の高い木——手のひら (palms)

きれいな花——唇 (two lips / tulips) と虹彩 (irises)

原産植物の果実——腰 (hips)

美しい雄鹿 — 心臓 (heart / hart)

2頭の遊び好きな動物 — ふくらはぎ (calves)

より小さな、飼い慣らされていない動物の大群 — 髪の毛 (hairs / harea)

2つの寺院 — こめかみ (temples)

数個の武器 — 腕 (arms) とけんこう骨 (shoulder blades)

数多の風見鶏 — 静脈 (veins / vanes)

ホテルの階段 — 足の甲 (insteps / inn-steps)

解散直前の下院 — 目と鼻 (eyes and nose / ayes and noes)

二人の学生 (もしくは学者) — 瞳 (pupils)

数人のスペイン大公 — 腱 (tendons / ten Dons)

他の多くの韻文のゲーム同様、エニグマ (なぞなぞ詩) はいまや消え失せたと行ってよい。この種のゲームは伝承童謡の中で生き長らえていると見做せるかもしれないが、大抵は何世紀も前からの残存である。なぞなぞ詩の概説を終えるに当たって、チャールズ・ディケンズの雑誌 *All the Year Round* (1876年11月16日号) から詩を一つここに転載しよう。これは、伝承童謡の 'Jack and Jill' から作られたなぞなぞ詩である。

T'was not on Alpine snow or ice,

But honest English ground,

'Excelsior' was their device;

But sad the fate they found.

They did not climb for love or fame,

But follow'd duty's call;

They were together in their aim;

But parted in their fall.

[dew water]

アルプスの雪か氷の上にではなく、
本当にイングランドの地面にあり、
「より高く」がかれらの企み。
だが、その運命はみじめであることがわかった。
愛と名声のために登ったのではなく、
職務の要請に従ったのだ。
かれらはその目的において一緒であったが、
落下の過程で別れ別れになった。 [答えは「露」。]

訳者註：‘Jack and Jill’ の唄は、つぎのとおりである。

Jack and Jill
Went up the hill,
To fetch a pail of water
Jack fell down,
And broke his crown,
And Jill came tumbling after.

ジャックとジルが
丘に上っていき、
手桶一杯の水を持ってきた
ジャックがころんで
頭をぶっつけた
それに続いてジルがころがった。

(はしうち・たけし／文学部／1990. 4. 25 受理)